73

『日本医譜』に記された脈診による天災予知

天野陽介・宮川浩也
小林健二・野澤隆幸
北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部

一、はじめに

宇津木昆台（一一七九～一八四八）の著になる『日本医譜』は、各種の文献資料を駆使して編纂した古代から江戸時代後期にいたる多数の日本医家の伝記集である。成立年は不詳（天保十四年、一八四三序）。巻冊は写本により一定していないが、七十巻二十冊であったと推定される（東條耕『近代著述目録後編』、中根肅『大日本名家著述目録』）。

同書に、脈診により天災を予知し、多くの人命を救ったという逸話が複数みられたので、それらを検討する。

二、方法

現存の写本は、国立国会図書館本、京大富士川本、東大呉文庫本、東大鶚軒本、無窮会神習文庫本、慶大富士川文庫本である。このうち伝存量の多い東大呉文庫本（日本医譜五編五十巻、続日本医譜二編二八巻、巻三一・三二・三七・三八は欠）を基本的に底本に採用した。欠巻と不鮮明な部分がある巻を国立国会図書館本、東大鶚軒本により補い、東大呉文庫本（巻十三～二十、二五、二六、二九、三十、三三、三四、三九～五十、続五～八、続十七、続十八）、国立国会図書館本（巻一～十二、二一～二四、二七、二八、三七、三八、続一～四、続九～十六）、東大鶚軒本（巻三五、三六）を底本（巻三一、三二は欠）として採用し、脈診による天災予知の逸話を検索した。

三、結果

古林見宜、八木玄迪、尼子道竹、明尚賢の四医家の記載中にあった。古林見宜は二例（加えて按語に一例）、他の三名は各一例ずつ、合計五（六）例の記載があった。また、古林見宜を除く三医家の記載中に半井（今

大路）道三にも同様に脈診で天災を予知した逸話があること示唆しているが、その詳細は『日本医譜』には見えなかった。

すべての逸話に共通している点は、旅行中に自身もしくは主人の脈診をしたら死脈であり、怪しんで周囲の人を脈診したら皆死脈であったことから、その地に大きな天災（山崩れ、津波）が訪れることを察したことである。そして、周囲のものに避難を呼びかけ、多数の人命を救ったとある。

古林見宜は勢州坂ノ下での山崩れ、軽井沢での浅間山噴火（しかし按語にあるように浅間山の噴火の逸話は孫か他人のものと思われる）を予知し、また、按語に火災を脈診により予知した逸話が引かれている。八木玄迪は東海道荒井駅での津波、尼子道竹は津波（場所は不明）、明尚賢は越後国下名立村の山崩れをそれぞれ脈により予知していた。また、古林見宜の一例では、後に山崩れが起こる地で死脈を得、避難した離れた場所では平脈が得られたとの記載もあった。

四、考察

この四名の医家が得た死脈はどのような脈であったのかは、記載されていないため不明であった。一般に死脈（怪脈）とされるものは、七怪脈（弾石脈・解索脈・雀啄脈・屋漏脈・蝦遊脈・魚翔脈・釜沸脈）、十怪脈（七怪脈＋偃刀脈・転豆脈・麻促脈）であるが、いずれが該当するか、もしくは一般に死脈とされているものと違う脈なのか、今後の検討が必要である。

また、明尚賢の按語に「皆以脈察其地之変、可謂良医矣。為医者、不可不精究脈学也。今医、棄而不講其如之何」とあるように、これらは医家にとって脈学を精究することが必要であることを訴えた逸話とも考えられる。